

園児の減少

一、学齡前児の教育の普及が徹底し、すでに頭打ちになった。しかも小児の出生率が減少したために、園児の減少が今や大きな問題となっている。幼児教育の必要を説いたり、発展の波に乗るのは楽しいことであるが、その反対の現象に対処することは苦しいことである。経営のことを考えなければ、幼稚園の子供の数が少ないことはよりよい教育のできる条件のはずである。小さな年少の園児たちが、三十人も四十人も一クラスにいることは、子供の方にとっても、また教える教師の側にとっても大変なことからである。この機会にクラスの定員を減らすことはできないもの

牛島 義友



であろうか。

私達が三十数年前に愛育幼稚園を開いた時に一クラス二十五名ではじめ、その後も同じ位であるが、このために経営時に困ることはなかった。現在の定数を大幅に減らすことは経営者にとっては勇気のいることと思うが、二十五人位の人数でできないはずはないし、またイギリスなどの幼稚園ではもっと少ない数である。小さい学校ほどよい学校と云う考えに立つべきであるし、マンモス幼稚園はこの際脱皮改変すべきではなからうか。あるいはまた一つのクラスを二人で受け持つという仕組みも考えられてよい。殊に

障害児を皆と一しよに保育するには複数の教師であることが絶対に必要である。進んで障害児保育を表明することによって、教育費の援助が得られるならばこの方向に進むのも大切なことではなからうか。

二、幼稚園、特に私立幼稚園においては、幼児の教育に關するさまざまな社会的ニードに対応するのがよからう。元来幼稚園の園舎ほど年間の使用時間から云ってぜいたくな施設はない。働らく母親のことを考えた延長保育も別わくで計画してもよいはずだし、小学低学年の学童保育もこの出身園で引き受けてくれるならば親たちは安心して任せられるであらう。あるいはまた教室や塾の運営も悪いことではないし、特に学習不振の学童のために補習教育をしようることなどは、幼稚園としてもよい仕事であらう。今日の小学校教育は幼稚園の雰囲気と余りにも相異なるために適応の困難な子供も少なくない。しかもこのような子供に對して、学校側はほとんど手を打とうとしないので、幼稚園側が卒園児に對して積極的指導を採ることが望ましいことではなからうか。児童館の役割を積極的にとつて地域への貢献を試みたいものである。

三、幼稚園の移動

都市における幼稚園児の減少には住宅地との關係が強い。大都市になると住宅は都心から離れて行くし、さらに若い世帯の住める場所は団地などに向つて行く。したがつて都心にあつた幼稚園が園児が減少するのは当り前であり、園児だけでなく、小学校でも学童がどんどん減つていく。元来幼稚園は住居から歩いて通える範囲内に数多くあることが望ましい。したがつて住宅事情に應じて当然幼稚園は移動してもよいはずである。このような移動の必要なのは幼稚園のみならず、教会、診療所、商店、デパートなどもこの流れに従おうとしている。しかも都心で幼稚園を持つてゐる人は地価の關係からその気になれば、郊外で広い幼稚園、または複数の幼稚園を作ることが可能である。私立大学なども都心から郊外に移ることによつて飛躍的發展を遂げている。大学はその所在地に学生が集まつて来るが、幼稚園は住宅地のとを追う必要がある。一つの団地も幼児の生長に伴なつてニードが少なくなるので、永久的施設を造ると云うよりも、たえず移動しながら發展する形態を考えるべきでなからうか。